

スペイン語の <estar+過去分詞> 叙述文

高垣 敏博

(東京外国語大学外国語学部教授)

1. <estar+過去分詞>構文

スペイン語の<estar+過去分詞>構文は、ある行為が行われた結果状態を表わす(1)のような例が典型であると考えられる。過去分詞として用いられる動詞はある一時点で完結する限界性 (*delimitado, télico*) の語彙アスペクト (*aspecto léxico; Aktionsart*) をもつとされる。

- (1) a. La puerta está abierta. ドアは開けられている (開いている)。
b. El coche está aparcado aquí. 車はここに駐車されている (している)。

構文の主語が他動詞の被動者に相当するところから<estar 受動文>と呼ばれることもある。しかし、(2a) からわかるように、*ser* 受動文では用いられる *por* 動作主句をとることができないこと、さらに、(2b) で示されるように、意図を表す副詞 *deliberadamente* などを伴うことができないこと、などの根拠で本来の受動文とは認められないと考えられるだろう。そこで、本論では(1)のようなタイプの<estar+過去分詞>構文を<estar+過去分詞>叙述文 (*atributiva*) と呼び、以下ではこの構文が形成されるための要件を明らかにする¹。

- (2) a. *La puerta está abierta *por el bedel*.
b. *La puerta está abierta *deliberadamente*.

2. 語彙アスペクトと動詞分類

上述のように語彙アスペクトの限界性が、<estar+過去分詞>叙述文の要件であることは非限界 (*no delimitado, atélico*) のアスペクトをもつ(3)の状態動詞や(4)の活動動詞²ではそれぞれ(5a)(5b)のように、この構文が成り立たないことから確かめられる。

¹ 本稿はスペイン語の<estar+過去分詞>構文についてコーパスに基づいて行う研究の序論となるものである。『スペイン語学研究』(東京スペイン語学研究会)20号にも重複掲載する。以下の例文は特に指示がない場合は、Francisco Barrera氏(東京外国語大学研究生、セビリア出身、30歳)の判断による。

² Vendler (1967), Pustejovsky (1991), Moreno Cabrera (1991), Fernández Lagunilla y De Miguel (2000), Marín (2004), Morimoto (1998)などを参照。

非限界動詞

- (3) 状態動詞 (estados) : amar, detestar, odiar, temer
- (4) 活動動詞 (actividades) : conducir un coche, empujar un carro, tocar la pared, buscar, golpear
- (5) a. *María está amada.
b. *El coche está conducido.

それでは、限界性の他動詞であれば、いつでも叙述文が作れるのかを検討してみよう。限界動詞にはつぎのようなものがある。

限界動詞

- (6) 達成動詞 (realizaciones) :
 - a. 状態変化動詞 : abrir (cerrar) una puerta, doblar una barra, apretar un tornillo, romper un vaso, abollar un coche, amueblar una habitación
[作成動詞] construir una casa, pintar un cuadro, escribir una carta, hacer una silla, imprimir un libro, componer una fuga
 - b. 位置変化動詞 : poner (~ en), colocar (~ en), atar (~ a), pegar, aparcar
- (7) 達成化動詞 : leer una novela, interpretar una sonata, estudiar un caso
- (8) 到達動詞 (logros) : cruzar un río; encontrar, descubrir, detectar; perder, olvidar; alcanzar, ganar, conseguir; reconocer; enviar, recibir; aceptar

(6)の「達成動詞」は(a)のように、一定の時間幅をもって被動者にはたらきかけ、その対象に状態変化を及ぼすものや、(b)のように位置変化を引き起こすものがある。ともに被動者が目に見える形で影響を受けている³。典型的な(1)の例文に見られる”abrir”や”aparcar”などが含まれる達成動詞はこのような分類の中で、<estar+過去分詞>叙述文をつくる中心的存在であると考えられる。(6a)の状態変化動詞には「作成動詞」としてまとめられる動詞グループも含まれるが、これについては5節で詳述する。

その他に、限界性をもつと考えられる2つの動詞グループがある。まず、本論で一つの下位類としてまとめる(7)のような「達成化動詞」である。これらは本来非限界の活動動詞であるが、一定の直接目的語を伴うことにより、動詞句全体として限界性アスペクトをもつにいたると考えられるタイプである。しかしながら、達成動詞のように被動者が状態・

³ Marín (2004:28) では被影項動詞 (verbos de argumento afectado) と呼ばれる。

位置変化を受けることはない⁴。「達成化動詞」は動詞句全体としては限界性をもつために、<estar+過去分詞>叙述文を形成すると期待されるのであるが、後述のように、文脈が特定化されないかぎり、(9a)のような非文となるのがふつうである。

つぎに、(8)の「到達動詞」も限界性動詞である。到達動詞はある一時点のみ生起する瞬時的事象を表し、それに先行するはたらきかけもなく、事象の生起後、対象に対していかなる変化をきたすこともない⁵。限界性の語彙アスペクトをもちながらも、(9b)のように、叙述文が許容されないのである。

- (9) a *La sonata está interpretada.
b *El río está cruzado. (ともに Marín 2004: 27)

3. 動詞の事象構造

Fernández Lagunilla y De Miguel (2000)⁶はこのような動詞がもつ語彙アスペクトの違いを、動詞の事象構造で8つのタイプに分類しているが、本論に関係するのは(10)に示された4構造である。

状態動詞は(10a)の「状態」事象をもつ。持続の単純事象でその内部に局面の変化はない。また、活動動詞は(10b)の「過程」事象で表される。意図をもつ動作主が行う活動事象なので、同一事象の連続である。その内部は同じ下位事象が継起して起こるので、例えば、“estudiar”のいかなる時点(局面)で中断しても「勉強」していることになる。これらはともに非限界事象である。

⁴ 達成動詞、達成化動詞、到達動詞の限界性はつぎのようにテストされる。

- (i) a. Ha acabado de escribir el artículo.
b. Ha escrito el artículo en media hora.
c. Está escribiendo el artículo.

達成動詞は (ia) acabar de+不定詞, (ib) “en~”のような時間副詞句などが可能であるところから完了アスペクトをもち, (ic) の進行形が可能なことから持続過程の局面も含んでいる。(ii)の達成化動詞, (iii)の到達動詞についても同様のチェックを試みる。

- (ii) a. Ha acabado de leer la novela.
b. Ha leído la novela en un día.
c. Estoy leyendo la novela.
(iii) a. Han acabado de descubrir el tesoro.
b. Han descubierto el tesoro en una semana.
c. *Están descubriendo el tesoro.

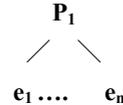
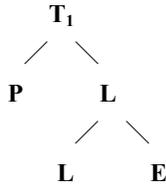
ともに限界性をもつが、到達動詞 (descubrir) は進行形にはならない、すなわち持続局面をもたないことがわかる(ただし、「これから発見する」という直前解釈では可能)。

⁵ Marín (2004:28) は被影項動詞(注3参照)に対し、変化を被らない達成化動詞や到達動詞を経路項動詞 (verbos de argumento de trayectoria) と分類している。

⁶ Pustejovsky (1991) に基づき、さらにスペイン語動詞に合わせて分類をより詳細にしている。De Miguel (2000) も参照。

(10) (a) 状態 Estado (E)

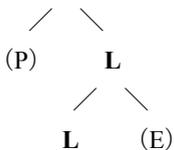
E[e] : tener, detester

(b) 過程 Proceso (P₁)P₁ [e₁...e_n] : estudiar, nadar(c) 移行 Transición (T₁)T₁ [P L[L E]] : abrir una puerta, aparcar un coche

これに対し, (10c) の「移行」事象は「達成動詞」の事象構造を表す。先行局面として非限界の「過程」(P)があり, 一つの完結点(L)に到って, 変化が起こり, その結果の「状態」(E)が後続する。全体として, 持続を伴う限界事象 (“evento delimitado con duración que culmina en la fase final”, Fernández Lagunilla y De Miguel 2000:27) となる。

一方, この移動動詞の中で, PとEが実現しない場合が「到達動詞」の事象構造に相当すると考えられる。

(10d) L (他動詞)



Fernández Lagunilla y De Miguel (2000:27, nota 17) によると, recibir や aceptar のような他動詞は, 瞬時動詞であるため限界性ではあるが, 先行する過程局面をもたず, 「語用論的には目的語に位置・状態変化が含意されるものの, 第2局面の『状態』が『目に見える局面』(una fase visible) を構成しない」のでPとEを欠く構造になるという⁷。

⁷ 持続局面を欠くのは, “un rato” で修飾できないなどが証拠。このような瞬時相の他動詞については十分解明されていないようである (Elena de Miguel 氏による教示) が, 自動詞の到達動詞 (L₁) の構造(i)に類似すると考える (Fernández Lagunilla & De Miguel 2000:27)。

(i) 到達 (Logro) L₁ [I] : explotar, llegar, nacer (自動詞)



4. 限界動詞

4-1. <estar+過去分詞>叙述文形成の要件としての達成動詞

これまで<estar+過去分詞>叙述文を形成する基本的な事象構造は、*abrir, aparcar* のように対象に状態変化や位置変化を及ぼす達成動詞、すなわち、(10c)の「移行」構造に相当するものであると仮定してきた。したがって本来的に移行事象であるとはいえない達成化動詞と到達動詞の2つのグループの動詞は限界性をもちながらも、(9a,b)で見たように、<estar+過去分詞>叙述文が許容されないことが予想されるのである。しかしながら、その一方で、文脈しだいでは、これらの動詞が<estar+過去分詞>叙述文を作ることが観察されることを以下で見ていく。この場合、これら2つのタイプの動詞も移行事象の構造を付与されているためではないかと仮定する。すなわち「移行」事象の構造をもつことが<estar+過去分詞>叙述文形成のための要件であるという仮説をこれらの2つの動詞グループで検証していくことになる。

4-2. 達成化動詞

(7)の達成化動詞(*leer una novela, interpretar una sonata, estudiar un caso*)は、(9a)で見られるように、一般には<estar+過去分詞>叙述文を容認しないとされる(Marín 2004:27)。ところが、矛盾するようであるが、「コンサートのプログラムの予定されている曲目の中で、当該のソナタが終了後、関係者の間で、終了した事実を確認する」というような文脈の中では同じ(9a)の文も問題なく用いられる、という母語話者の観察が見られる⁸。この場合には、「プログラムの中に位置づけられている」ため先行する過程事象Pが、さらに「演奏の終了」によって、完結点Lを経て、つぎの曲目に移ったことが結果状態Eを印象づけるために、擬似的な移行事象(達成動詞)を形成するに至っているのではないかと考えられる。

たしかに達成化動詞のもつ限界性は動詞固有のものではなく動詞と目的語からなる動詞句全体で合成的に与えられる性質のものであるためどうしても(9a)には抵抗感が残るのはやむをえないが、それでも(11)のように先行局面の存在を前提とする副詞*ya*⁹を補うことにより容認度が増すという母語話者の判断がなされる。

- (11) a. Esta sonata ya está interpretada.
b. Esta novela ya está leída.
c. El caso ya está estudiado.

先行する持続局面(「まだ演奏がなされていない、ないしは、プログラムで予定されている」)が際立たされ、(10c)の構造で考えると、非限界の*estudiar, leer, interpretar*など持続事象P

⁸ Elena de Miguel 氏, Francisco Barrera 氏の判断による。

⁹ García Fernández (1999: 3135)によると、*ya* (や *todavía*) のような副詞は、「一つの事象の展開の中で継局的局面を表示する」。「El arroz ya está cocido.」では、お米が調理されていなかった、現時点に先行する局面に言及することになる、という。

に完結点 L を付与するという意味的補充がなされたために、移行事象に相当する構造が確保されたためであると考えられるだろう¹⁰。

4-3. 到達動詞

到達動詞でも同じような意味的補充による移行事象化が起こることを見てみよう。もともと到達動詞は、(10d) で見たように先行する持続過程 P の局面をもたない限界動詞であるため、<estar+過去分詞> 叙述文形成の要件である「移行動詞」の構造とはなっていない。そのため、当然、(9b) や (12) のように容認度が低くなる。

- (12) a. ??La cartera está encontrada.
b. ??La cartera está perdida.
c. *El techo está alcanzado.
d. ??El sueldo (de este mes) está conseguido.
e. ??Su voz está reconocida.

しかしながら、ここでも達成化動詞の場合と同じように文脈を特定化することによって容認度の変化が起こることがわかる。(12) の例と対比的に、(13) のように異なる性質をもつ主語（すなわち他動詞の直接目的語に相当）が与えられた場合には、同じ動詞による叙述文でも問題なく容認されるようになることに注目したい。

- (13) a. El tesoro ya está encontrado.
b. El virus ya está detectado.
c. La memoria del nefasto crimen ya está perdida en el pueblo.
d. El objetivo del proyecto ya está alcanzado.
e. El dinero de la colecta ya está conseguido.
f. El hecho ya está reconocido por toda la comarca.

(a) では、発見されるのが単なる「財布」(cartera) のように個人的所有物ではなく、人々が意図的に探し求めていた「財宝」(tesoro) が発見されたのである。(b) でも人々が探していたコンピュータウイルス (virus) がやっと突き止められる。(c) では過去に犯された凶悪犯罪の忌むべき記憶 (memoria) からやっと人々が解放されたというような意味合いである。また (d) は長年人々が追求していた計画の目標 (objetivo) が達せられ、(e) ではある募金活動を行って目標としていた金額 (dinero) に到達する状況である。さらに (f) は、ある事実 (hecho) が地域中の人々にまで伝播し、それが是認されてしまった事実を表現している。

¹⁰ 対照的に、不可算の目的語 (=叙述文主語) をとる場合は限界動詞とはならない。

- (i) a. *La física ya está estudiado.
b. *El español ya está leído.

これらの表現に共通する状況は、それぞれの動詞が表す瞬時事象の達成を目標として、その達成のために不特定多数の人々の意図的な営為（例えば、*encontrar el tesoro*「財宝の発見」のために *buscar el tesoro*「財宝を探す」という意図的持続行為）があったことを前提とすることである。叙述文主語が表す対象物が不特定多数の人が求める種類の対象ではなく、(12)の「財布」(*cartera*)のように個人的（個別）な対象物では容認度が下がるのはこのためであろう。

完結点(L)しかもたなかった到達動詞が、不定（総称的）動作主の意図的営み(P)を確保し（先行局面を示す副詞 *ya* を伴うことにより明示化される）、同時に、状態局面(E)もより顕在化した結果、達成動詞のもつ移行事象構造(10c)を得ることになる。このような意味構造変化を認めることに(13)の文が容認されるようになると考える¹¹。

さらに例を見てみよう。

(9b) で見た“*cruzar el río*”も、計画的な作戦行動などの一部として目標が達成される状況を想像するようなときはその叙述文が自然な発話と判断される¹²。

- (14) a. ¡Comandante, el río ya está cruzado!
b. El frente enemigo ya está cruzado.

また、“*enviar, recibir*”も、瞬時動詞でありながら、(15)のような行為が日常的事務作業の一つとして、計画的、意図的に遂行されるような文脈では許容されるという。

- (15) a. La carta ya está enviada.
b. La carta ya está recibida.

ただし、*enviar*の方が自然であるとの観察もある。「発送」の方が「受け取り」よりも意図性が感じられるためであるかもしれない。しかし、*recibir*は郵便配達宛先から受領通知書を受け取り、それにより発送人に配達済みの通知をするような場面を考えると許容度が増すようである。

- (16) La propuesta está aceptada.

“*aceptar (la propuesta)*”も対立的過程“*presentar (la propuesta)*”が想定でき、これによりPが確保されると＜*estar*＋過去分詞＞叙述文成立の要件を満たす。

¹¹ 次の命令文(i)に対する(ii)のように、目的語との組み合わせによって意図性が含意されることがある。

- (i) a. *¡Pierde la cartera!
b. *¡Olvida ese número!
c. *¡Reconoce a Pedro!
(ii) a. ¡Pierde cuidado!
b. ¡Olvidá! (=¡Olvidate de ella!)
c. ¡Reconoce este hecho! (高垣 1999: 147-8)

¹² 以下(14)～(17)、(19)～(21)の判断はElena de Miguel, Francisco Barrera 両氏による。

さらに、実現を表す *realizar, efectuar* などの場合も、計画 (*proyecto*) や作戦 (*operación*) が推進された結果、それが完結点に到る移行事象であると見なされると (17) が許容される。

- (17) a. El proyecto ya está realizado.
- b. La operación ya está efectuada.

つぎに、開始、終結、中断などの完了アスペクトを表わす (18) のような到達動詞である。

- (18) *empezar, comenzar, iniciar* (開始) ; *terminar, acabar* (終結) ;
 interrumpir (中断)

過程が終結ないしは中断する場合と同様、開始でも (19) のように叙述文は成立している。これまでの議論と同じく、開始までの先行持続局面 P が予定されたものとして意味的に補完される場合と考えられるのであろう¹³。

- (19) a. El trabajo ya está empezado.
- b. El concierto ya está acabado.
- c. La emisión está momentáneamente interrumpida.

さらに、社会のさまざまな場面で用いられる決まり表現についてもこのような事象構造の変化を想定することができるだろう。

- (20) a. La mesa está reservada.
- b. El libro está prestado.
- c. Esta casa está vendida.
- d. El piso ya está comprado.

(20a) はレストランで、(20b) は図書館で、また (20c,d) は不動産業者とのやりとりの中で聞かれるものである。どの動詞も本来、活動局面 P をもたない動詞であるが、それぞれの場における業務の予定された一つの活動として認識され、それが遂行されたことを描写している。

- (21) a. Ya está dicho. (Porroche 1988: 71)

¹³ (i)のような他動詞ではなく、(ii)の自動詞の *empezar* では非文となることがわかる。

(i) Ya está empezado el teatro. [+Agente]
(ii) *Ya está empezado el invierno. [-Agente]

b. El café ya está pedido.

また、(21a) は、例えば父親が何度も同じ注意を繰り返して子供を叱っている場面（「それはもう何度も言っただろう」）で用いられる。(21b) でも、すでに同席者と一緒に注文することを前提として発言（「コーヒーはもう注文してあるよ」）が可能になるわけである。ともに先行持続局面の存在が状況的に前提されている¹⁴。

本節では、達成動詞に固有であると考えられる移行事象構造をもつことが <estar+過去分詞> 叙述文形成のための必要条件であると仮定し、その意味では不完全な限界事象である達成化動詞および到達動詞も、P の先行下位事象と結果の下位事象 E が意味的に補完される¹⁵ ような状況になると、<estar+過去分詞> 叙述文が成立する可能性が出てくるを見た。擬似的な移行事象構造が得られたことによるものと考えたい。

5. 作成動詞

さて、<estar+過去分詞> 叙述文の特徴として、動作主を表す *por* 句をとれないことはすでに (2a) でふれた。しかしながら、実際には、(22) のように *por* 句を伴う例が存在する。

- (22) a. Este cuadro está pintado por Velázquez / por un niño / por un inexperto /
*por Luis. (De Miguel 2000: 212)
b. Ese almanaque está diseñado por Mariscal. (Marín 2004:61)
c. Este artículo está escrito por una persona indocta. (Marín 2004:60)
d. *Esta casa está construida por mi abuelo. (Marín 2004:61)

ここに見られる動詞は、(6a) の状態変化の達成動詞に含まれる作成動詞 (*verbos de creación*) である。construir una casa, pintar un cuadro, escribir una carta, hacer una silla, preparar la comida, imprimir un libro, componer una fuga などの動詞句では、目的語が表す対象は、事象が完結した時点ではじめて創造されるもので、行為が進行している先行局面においてあらかじめ存在することはないという特徴をもつことに気がつく。ところで、(22a-c) の例では、このような作成動詞が作成者を表す *por* 句を伴っているのであるが、なぜ作成動詞が *por* 句を

¹⁴ 到達動詞と見なされるのにもかかわらず容認されない例がある。

(i) ??El gol está marcado. (marcar el gol シュートして得点を入れる)
シュートが期待されていて、ついに得点を得た場合を考えても許容されないという。

(ii) Esta película ya está vista. (ver la película その映画を見る)

これは非文ではないが、「何度も見て、あるいは、最初を少し見ただけで飽きる」という特化した意味でのみ可能であるという。同じ知覚動詞でも *oír* にすると(iii)のように意味を成さないという (以上 Elena de Miguel 氏の判断)。

(iii) *Este programa de televisión está ya visto.

¹⁵ ただし、この先行過程の意味的補完については、現在進行形にするなどの文法的チェックで確かめることができない。

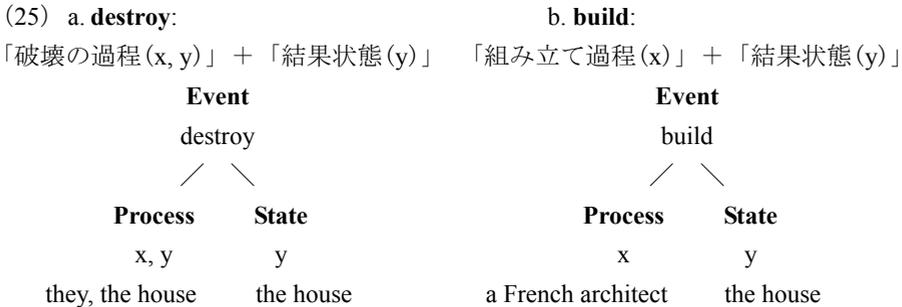
伴うのか検討してみよう¹⁶。

5-1. 義務的 por 句

Grimshaw & Vikner (1993) は作成動詞”build”と単なる達成動詞である”destroy”を比較する。前者は (23b) のように動作主の by 句がなくても容認されるが、後者では (24b) のように非文となる。

- (23) a. The house was destroyed by them.
 b. The house was destroyed.
 c. The house was destroyed in three days.
- (24) a. The house was built by a French architect.
 b. *The house was built.
 c. The house was built in a month.

この違いを、事象構造の差で説明する。destroy や build はともに複合事象 (Event) であり、過程 (Process) と状態 (State) から成っている。(25a) のように、destroy では第 1 の下位事象である破壊過程 (Process) を構成する要素は項 x (動作主) と項 y (対象) で、破壊された結果状態 (State) を表す第 2 下位事象は y のみが参与する。このとき、動詞の事象構造は主語、目的語、副詞的要素などの非述語的要素によって同定 (identify) されなければならないと仮定される。ここで受動化が起こることにより主語項の x が削除されても、過程と結果状態の 2 つの下位事象はともに y により同定されていることになる。



一方、作成動詞 build の場合を見てみると、(25b) からわかるように、もともと作成過程 (P) に関与するのは x のみで、y の「家」はまだ存在していない。そこで、受動化が起こり、主語項の x が削除されると、こんどは過程を同定する要素がなくなってしまうので、x は義務的に (付加詞として) 残る必要が出てくるという。このとき同定するのはたらしきをもつのは上述のように、副詞要素でもよいため、(24c) の時間表現 'in a month' が動作主句の

¹⁶ むしろ por 句を伴わない、?La casa está construida. や ?El cuadro está pintado. では抵抗感がある (Marín 2004:28)。ただし、(26) を参照のように副詞が省略されているとも考えられる。

代わりに同定要素として残ることも可能である。これに対し上で見た *destroy* では副詞要素は随意的ということになる。

作成動詞による <estar+過去分詞> 叙述文に *por* 句が義務的に生起するのもこのような事象構造の差によるためであると考えるが、(26) の例からも確認できるように、*ya* や *bien* などの副詞がこれを代替する場合も正しく叙述文となる。

- (26) a. La casa *ya* está construida.
b. El cuadro está *bien* pintado. (ともに Marín 2004:29)

5-2. *por* 句の特性

ところで、作成動詞が伴う *por* 句は意図的な活動をそのまま反映するほどの動作主性をもたないことは (27) のような意図を表す副詞と共起しない (6.2 参照) ことから確かめられる。

- (27) a. ??Este artículo está escrito *deliberadamente/ intencionadamente* por una persona indocta.
b. *Este almanaque está diseñado *voluntariamente* por Mariscal.

この点、Este artículo fue escrito *deliberadamente* por una persona indocta. のように活動局面を同定できる *ser* 受動文と比べることにより、*por* 句を伴う作成動詞の <estar+過去分詞> 構文は本来的な受動文と見なすことはできないことが理解できる。

つぎに創作活動の局面に参加する名詞句 (*por* 句によって表されている) には意味的特徴があることにも注目しておきたい。すなわち、この名詞句は Velázquez や Mariscal のように世界的に認知されている代表的創作者であるか、または un niño, un inexperto, una persona indocta など不定名詞句である場合に限られ、Luis や mi abuelo など一般性の低い個人は許容されない¹⁷。これらはともに創作物 (=被動者主語) の「特性 (propiedad)」として主語を意味的に特徴づけることができるような名詞句であり、それらが用いられる場合に限って叙述文が許容されると考えられる (Conti 2002:24; Marín 2004:60)。

5-3. 擬似作成動詞

さらに、(28) を考えてみよう。

¹⁷ ベラスケス、マリスカルなど有名な創作者はその創作物を包含する関係 (メトニミー) にあり、一方、un niño 「こども (のような人)」, un inexperto 「未熟な人」, una persona indocta 「無教養な人」などの不定名詞句は、著名人と対立的に、無名であり、期待値とかけ離れた存在を一般化して表していると考えられないだろうか。しかしこの一般化については今後の課題となる。ところで、Conti (2002: 24) はさらに、もう一つ、対比的使用のケースもあるという (例、El documento está firmado *por mi amigo, y no por el tuyo*) 。

(28) a. El documento está firmado por el embajador.¹⁸

b. El abrigo está agujereado por las polillas. (ともに Marín 2004:61-62)

Marínによると、(a)では「大使の署名」(la firma del embajador)が、(b)では「シミによる独特の被害」(el específico tipo de daño causado por las polillas)が存在もしくは痕跡(indicios)として認知できる(reconocible)場合である。(28a)と異なる主語をもつ(29)が許容されないことがその証左となるという。

(29) *La paz está firmada por el embajador.

調印される講和条約(la paz)は、署名が見える書類(el documento)とは違って、大使あるいは大使の署名という存在ないしはその痕跡が認知できないからである。

これらの文において、新たに作成された対象物は、(28a)では大使の署名で、主語の書類の一部を成している。また、(b)では主語であるコートが「シミ」(polillas)によって受けた被害である独特の「穴」(agujero)を痕跡として含んでいることになる。ともに被動者主語そのものが新たに生み出されたわけではないが、それまで存在しなかった対象物が、事態の完結とともに出現したことになるため、拡張された意味での作成事象と見なされるのである。

6. 結論

6-1. <estar+過去分詞>叙述文

本論では<estar+過去分詞>叙述文が成立するための要件について議論し、以下の点を主張した。

- ① 達成動詞が<estar+過去分詞>叙述文をつくる基本的な事象構造をもつとの観察から、移行事象をもつことがその成立要件であると仮定した。その上で、限界性動詞である達成化動詞、到達動詞についても叙述文ができる可能性を検討した。これらの動詞(句)は、一般にそのままでは叙述文を形成しないが、先行局面を顕在化するような状況、すなわち、持続過程 P (やその反映として結果状態 E) の下位事象が意味的に補完され、移行事象を構成するようになる場合には<estar+過去分詞>叙述文が可能になると考えられる。またこう仮定することによって、達成化動詞や到達動詞であっても<estar+過去分詞>叙述文をつくる特定の事例をうまく説明することができる。
- ② 達成動詞の下位類である作成動詞では作成を表す過程の下位事象 P を同定する参与者を por 句で明示する(同じく同定のはたらきをもつ副詞 ya, bien などでも代替できる)必要があることを確認した。ただし、por 句が表す名詞句を伴っても意図性はないので、本来の動作主とはいえないため、受動文とはみなされない。

¹⁸ 擬似作成動詞でも、作成動詞と同じ性格の por 句をとる: El documento está firmado por Cervantes / por un desconocido / *por mi amigo. (以上 Conti 2002)。また、動作主性も十全ではない: El documento está firmado */? voluntariamente por Cervantes.

6-2. その他 por 句を義務的にとる動詞

ところで、いま見た作成動詞以外にもスペイン語には por 句を義務的にとる <estar+過去分詞> 構文タイプが多く見られる。代表的なタイプを (30) に例示しておこう。

- (30) a. La ciudad está rodeada *(por las montañas). (位置関係)
b. El camino está cortado por los manifestantes. (位置関係)¹⁹
c. El camino está cortado por el árbol. (位置関係)
d. Esta comisión está formada por los diez miembros. (構成関係)
e. Las alergias están provocadas por el polen. (因果関係)
f. Este país está gobernado por un dictador. (支配関係)²⁰

このような por 句を義務的にもつ <estar+過去分詞> 構文に関する考察については稿を改めたいが、本論で扱った <estar+過去分詞> 叙述文とは明瞭に異なる性格をもっていると考える。

すなわち、本稿で扱っている <estar+過去分詞> 叙述文では、(i) 過去分詞として用いられる動詞(句)は限界性の語彙アспектをもつことを要件とし、(ii) 先行する事態がすでに起こった結果状態を述べる。したがって、(31a) で示すように、対応する能動文とは論理的等価関係にはならない。

これに対し、(30) のようなタイプの por 句を義務的に伴う <estar+過去分詞> 構文では、(i) 過去分詞として用いられる動詞は基本的に状態動詞であり、(ii) (31b) からわかるように、対応する能動文と論理的に等価で、参与する二者の恒常的な関係を表している。

- (31) a. La puerta está abierta. ≠ (Alguien) abre la puerta.
b. La ciudad está rodeada por las montañas.
= Las montañas rodean la ciudad.

また、同じ動詞”cortar”を用いても、por 句として無生物”el árbol”をとる (30c) と比べて、「人間」”los manifestantes”をとる (30b) では動作主性が強く感じられる。このことは (32) のように意図性を表す副詞 *deliberadamente* や目的の従属節 (*para~*) と共起することから確認できる。

- (32) El camino está cortado por los manifestantes *deliberadamente/ para protestar por la construcción de la autopista.* (De Miguel 2000:212)

¹⁹ (30b,c) は道が遮断されるというある種の空間関係を表すという意味でここでは広義の位置関係としておく。(30b) は De Miguel (2000:212) の例。

²⁰ さらに Bosque (1999:293-294) はこれ以外につぎのようなタイプの例をあげている。

- (i) a. Su misión está amenazada por contratiempos económicos.
b. El premio está patrocinado por una fundación benéfica.
c. El escenario estaba iluminado por decenas de focos.
d. Los misioneros franciscanos de África han estado perseguidos por tribus locales durante muchos años.

(30) のような構文はどれも *por* 句を義務的に伴い ((30a) 参照), かつ, 対応する能動文との間でボイスの変換をしていると考えられるために <estar+過去分詞> 叙述文とは異なる, <estar+過去分詞> 受動文であると規定することができるだろう。

参考文献

- BOSQUE, Ignacio 1999: "El sintagma adjetival. Modificadores y complementos del adjetivo. Adjetivo y participio", *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, cap. 4, pp. 217-310. Espasa Calpe.
- CONTI JIMÉNEZ, Carmen. 2002: "La pasiva con estar. Propiedades léxicas y tipificación", ms. UAM.
- DE MIGUEL, Elena 1992: *El aspecto en la sintaxis: Perfectividad e impersonalidad*, Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid.
- _____ 1999a: "Relaciones entre el léxico y la sintaxis: Adverbios de foco y delimitadores aspectuales", *Verba*, 26, pp. 97-128.
- _____ 1999b: "El aspecto léxico", *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, cap.46. pp. 2977-3060. Espasa Calpe.
- _____ 2000: "Relazioni tra il lessico e la sintassi: Classi aspettuuali de verbi ed il passivo Spagnolo", *Studi Italiani di Linguistica Teorica e Applicata*, 2, pp. 201-217.
- FERNÁNDEZ LAGUNILLA, M. and E. DE MIGUEL 2000: "El operador aspectual SE", *Revista Española de Lingüística* 30-1, pp. 13-43.
- GARCÍA FERNÁNDEZ, Luis 1999: "Los complementos adverbiales temporales. La subordinación temporal", *GDLE*, cap.48, pp.3129-3208.
- GRIMSHAW, J. and S. VIKNER 1993: "Obligatory adjuncts and the structure of events", (ed. E. Reuland et al) *Knowledge and Language*, pp.143-155, Kluwer Academic Press.
- HENGEVELD, K. 1986: "Copular verbs in a functional grammar of Spanish", *Linguistics*, 24, pp.393-420.
- MARÍN, Rafael 2000: *El componente aspectual de la predicación*, Tesis doctoral, Universidad Autónoma de Barcelona.
- _____ 2004: *Entre ser y estar*, Arco Libros.
- MORENO CABRERA, J. C. 1991: *Curso Universitario de Lingüística General*, tomo 1, Síntesis.
- MORIMOTO, Yuko 1998: *El aspecto léxico: delimitación*, Arco libros.
- PORROCHE, M 1988: *Ser, Estar y Verbos de Cambio*, Arco Libros.
- PUSTEJOVSKY, James 1998: *The Generative Lexicon*, MIT Press.
- _____ 1991: "The syntax of event structure", *Cognition*, 41, pp.47-81.
- VENDLER, Zeno 1967: *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.
- 高垣敏博 1999: 「語彙アスペクトとスペイン語の <estar+過去分詞> 構文」『東京外国語大学百周年記念論文集』, pp.139-168.

- _____ 2004: 「スペイン語受動文の生産性について」『スペイン語学論集：寺崎英樹教授退官記念』, pp.72-82, くろしお出版.
- 田中裕司 2002: 「動作主句の随意性と受動文の類型」『事象と言語形式』筑波大学現代言語学研究会編, 7章, pp.199-226, 三修社.